

学長退任に当って

今回の学長退任に当り、この6年間に同窓各位、すなわち東京外語会の皆様から頂戴のご厚意とご支援・ご協力にたいし、心からの感謝と御礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

私の在任中は、東京外国語大学にとって、府中新キャンパスへの移転、独立100周年（建学126年）記念の諸事業、それに大学改革や国立大学の在り方に関する問題など、様々な重要課題が多い時期でしたので、語るべき問題も多々あるのですが、いまここでは、東京外国語大学の体質を象徴する一つの問題に限って、事実経過をご報告かたがた回想し、退任のご挨拶に代えさせていただきます。

その一つの問題とは、「朝日新聞」などではきわめて恣意的に報道され、大学の責任者として厳重に抗議した独立100周年（建学126年）記念式典における国旗掲揚の問題であります。

ご承知のように、たまたま本学が記念式典を挙行することになった1999年には、その夏に「国歌・国旗法」が制定され、国の機関である国立大学は、祝日や記念行事の際に国旗を掲揚すべきことが法制化され、その旨の通達も本学に来ていました。しかし、私自身は特段この通達にこだわるつもりはなく、だが同時に明治6年の建学以来、一貫して国の機関として存続してきた本学の100周年記念式典であれば、何らかのかたちで、式典に国旗を掲げて当然だとは思っておりました。そこで、できるだけスマートにこの問題を処置しようと心の隅で考えていた私は、当時、大詰めを迎えていた「東京外国語大学史」の編纂委員会のあとで、稲田雅洋教授や高橋作太郎教授ら若干の委員の先生に、本学の校旗とセットにして、あまり目立たない形で国旗を掲げるアイデアはどうか、などとお話した記憶があります。その一方で私自身は、海外からのゲストを迎えた記念シンポジウムなど100周年記念事業のプログラム遂行や大学史の発刊、東大オーケストラと演奏する「大学

中嶋嶺雄(C昭35)

祝典序曲」の練習などに多忙を極め、まだ国旗問題の結論は出していなかったのです。

そのような時期、つ

送別会で挨拶する中嶋前学長

残り式典まで1週間を残す時期だった10月27日(水)の夕方から私は一橋大学の如水会の依頼で「建国50周年の中国とその将来」と題する講演を如水会館でしていたのですが、その最中の夜8時前後、学生部長の富盛教授から私に緊急メッセージが入り、至急大学に戻ってほしいとのことでした。早々に講演を打ち切り、学長室へ戻ると、当日の大学院前期課程委員会（実際の大学院教授会で、委員長は井上史雄教授）で、大学当局は記念式典に国旗を掲揚する意向だが、断固反対するとの決議が圧倒的多数で可決されたとのことで、井上、在間進、増谷英樹の各コース代表の3教授が学長に会見に来たのです。私としては、まだ私自身の意思も決定していないのに、しかも大学院課程委員会は教学に関する事項を審議する場であり、議題にもなっていないかつ国旗問題での決議は受け容れられない、大学という場はこれら思想・信条にもかかわる問題については、一人でも少数意見があれば、それも尊重すべきであって、学内有志ならともかく、正式な学内の会議で決議などすべきではないと強く拒否したのです。しかもこうなった原因は、学長としての私の意向とは別に、本学には新しい国旗がなかったので、この際購入しておこうと考えた事務当局がたまたま国旗の見本もしくは購入予定のものを庶務課に置いてあったところ、それを見つけた教職員が式典用のものと誤解し、大騒ぎになったのが真相でした。

しかし、事柄がこう発展した以上、この問題はうやむやに出来ないばかりか、学長として折角の式典を混乱させることは絶対に避けねばならないと考えた私は、翌々29日(金)に同じく如水会館で開かれた関東甲信越地区国立大学長会



ならないこと。

- ②大学の在り方、運営について長期的展望(目標)と計画性を持たねばならないこと。
- ③教育研究、とりわけ研究のための財源を競争的資金に応募して、あるいは産学連携によって、みずから獲得しなければならないこと。

速山プランは6月14日に突如、発表されました。国立大学の構造改革の方針として、3点提起されていますが、巷で注目されているのは、大学(とりわけ単科大学)の再編・統合問題と、トップ30大学の選定・強化です。本学がとりわけ危機感を抱いているのは、前者の問題です。

しかし、文科省は再編・統合の目的や意味、その手順についてはまだ具体的に提示しておらず、いずれの大学でも手探り状態にあります。しかも、統合は相手あっての話で、一方的に進むものではありません。本学としては、教育研究を充実していくための意味ある統合については検討を怠らないつもりですが、当面は、本学の改革に全力をつくす方向で進みます。また、統合という形ではなくても、今後は、近隣の都内の大学との間に、四大学連合に準じるコースなどを組み立てて、教育研究の可能性を拡大していくことにもつとめたいと考えています。]

四大学連合、来年からの実施に向けて努力
—この4月に発足した四大学連合についてはどのように取り組まれますか。

「四大学連合は一昨年来はなばなく報道され、本年3月には四大学連合憲章の調印までこぎつけました。しかし、本学は、昨年4月から7月にかけて、連合の動きの蚊帳の外に置かれるなど、困難な局面も経験してきました。四大学連合は学生の履修や進学の幅を広げること、単一大学では困難な学際的・複合的研究教育を推進するなど、多くの魅力的な面をもっており、われわれとしては今後も、積極的にこれに取り組んでいきたいと考えております。具体的には目下東工大との間で、学部レベルと大学院レベルで、それぞれ一つずつ2大学間コース案の検討が進んでおり、本学提案の四大学間複合領域コー

スの検討も開始されたところであります。このうち一つでも来年4月からの開講にこぎつけることができれば、他の三大学と足並みを揃えることができるので、慎重かつ粘り強い努力を続ける覚悟でおります。]

同窓会との関係を更に密接に

—大学と同窓会の関係についてどのようなご見解をお持ちですか。同窓会に対する要望もあればお聞かせ下さい。

「同窓会には独立百周年記念事業で多大のご尽力をいただきましたし、常日頃学生の就職指導などでお世話になっておりまして、大学として深く感謝しております。今後とも、こうした密接な関係が維持され、多面的なご支援を賜わることが出来ればと願っております。たとえば、各界で多方面にわたって活躍の卒業生の方々による連続講演会や、シンポジウムなどが企画できないでしょうか。多様な実業界の現実、社会活動の現実を学ぶ良い機会で、参加者には単位を与えるなどの仕組みも考えてみる価値があると考えます。また、『国立大学法人』への移行にさいして、経営面での助言を仰ぐこともあろうかと考えております。そうしたご協力をいただくためには、大学と同窓会との関係をさらに密接にしてゆかなければなりません。今後ともよろしくお願いいたします。]

座右の銘、趣味

—最後に座右の銘やご趣味について。

「長崎で原爆投下直後、被爆者の治療に献身し、みずからも原爆病で亡くなった永井隆博士の墓碑に『我は無益の僕なり。為すべきことを為したるのみ』と刻まれていることを知り、心を打たれました。以来、それが私の人生の道標になりました。

年齢に応じていろんな趣味を楽しんできましたが、最近はどうも体がついていきません。若い時から続いていることと言えば、折々に座禪を組むことぐらいでしょうか。]

—長時間どうもありがとうございました。

議に私と懇意の間柄であった文部省の佐々木正峰高等教育局長も出席されることになっていましたので、事前に電話で文部省の意向を十分に確かめたうえで、夜通し思い悩んだ末に考えついた私のアイデアについても同会議の前と後に同局長にお話して、「すべて了解します」との合意をとりつけたのでした。そのアイデアとは、本学に開講されているすべての言語の使用国のうち本学と交流協定を結んでいる国（但し、台湾および北朝鮮は国交がないので除外する）の国旗（英語の場合はイギリス、アメリカ、オーストラリア、カナダの国旗）を大学の課程の配列順に立て、最後は日本課程なので国旗が一巡して日の丸が中心に来るようにするというものでした。しかし、式典での国旗の掲揚はフォーマルなものなのでそのような国旗が期日までに揃うかどうかは次の緊急問題でした。

この点については、私自身が事前に外務省の儀典室に問い合わせたうえで、同日夜おそく、運転手の山崎 誠君と葛西臨海公園脇の外務省儀典室分室を訪れ、「アテナ・フラッグ」という業者の大きな倉庫に入ってチェコやカンボジア、ミャンマーなどの稀少な国旗も正式なものがあった、借り出せること、翌週の火曜日までに大学に届けてもらえることを確認したのでした。

しかし、このことが外部に漏れると、またどんな妨害に出合うかかもしれず、『朝日新聞』の記者などは学内を闊歩していて、学長室にまで入りこみ、さらに式典が2日後に迫った11月2日（火）には、私のみが一人残っていた学長室へ夜9時半頃に上村忠男教授や香掛良彦教授、それに私の記憶が正しければ、中野敏男教授、岩崎稔助教授ら数名がまるで大学紛争時の大衆団交のように押しかけてくるという有様でしたので、富盛学生部長、高橋（作）図書館長、大坂紘一郎事務局長らにのみ私のアイデアを打ち明け、同日午後には届いた30本前後の国旗を庶務課の田川恵二係長や山口登之係官、運転手の山崎君と私の4人でシャッターをおろした大学の車庫内で並べてみるというリハーサルをしたのでした。式典当日は早朝より北とびあの会場へ

行き、日の丸を一段高くと考えていた大坂局長ら事務方による配列を、すべて均一とするよう私の指示で並べ直し、ようやく10時半からの式典に臨んだのでした。私は式辞のなかで、当日朝の『日本経済新聞』が一面トップにスクープ報道した、いわゆる「五大学連合」にあえて触れることを来賓の石弘光・一橋大学長に事前了解をとり、文部省を代表して訪れた小此木八郎政務次官らの祝辞もとどこおりなく済んで、一部の教官がピラをまいたり、イタリア語専攻の高下一郎教授が「あの日の丸は何だ」と私をこづいたりした程度の混乱で、無事式典を終えることができ、私自身も東外大オーケストラとともに懸案のブラムス「大学祝典序曲」を演奏することができました。

永い一日が終わって家に帰ると、TVが一斉に「五大学連合」について報道しており、とくに「テレビ朝日」は、当日の式典の様相も伝えながら、三和総合研究所の森永卓郎主任研究員のコメントを詳しく紹介していました。森永研究員は、「五大学連合」構想への期待を大いに語りつつ「しかし、問題は学内でしょう。このような開かれた大学の在り方に反対する教官からの強い抵抗に出会うのではないのでしょうか」と語っていたのが印象的でした。事態は森永氏の予想通りでしたが、「五大学連合」ないしは今日の「四大学連合」については、いずれ改めて語る機会があるものと思われまます。

中嶋学長送別会

8月末日に退官される中嶋嶺雄学長の送別と、高橋作太郎、富盛伸夫副学長の慰労を兼ねた外語会有志によるお別れ会が8月8日、東京お茶の水のホテル聚楽で開かれた。

母校の教官と学長を務められた鎌ヶ江信光氏（C昭8）、鈴木幸壽氏（D昭18）をはじめ約50名が出席して、東外大のために尽くされた三人の方々の労苦に感謝した。学長在任の6年間は、府中の新キャンパス建設・移転、独立100周年の募金、記念式典、記念会館としてサテライトの取得、大学史の刊行などの事業が重なった。中嶋学長はこれらの課題に立派な実績を残され

ただけに、懇談の場では数々のエピソードが披露され、また、退任を惜しむ声が聞かれた。

中嶋学長の恩師でもある鐘ヶ江元学長は「中嶋学長が東外大の名を全国に広めたことには、同窓として厚く礼を言いたい。もう一期学長を務めるものと期待していた。新校舎を造らせておいて、もう建設者は要らないという学長選挙の結果は解せない」と退官を惜しむ送別の言葉を述べ、「中国現代史の専門家として優れた研究成果を挙げられている。今後も日本のためアジアのために頑張ってください」と励ました。乾杯の音頭をとった鈴木元学長（前外語会理事長）は、ご自分の経験をかえりみて、いかに国立大が学長が激務であるかを語り、中嶋学長にねぎらいの言葉を述べた。

中嶋学長はお別れの言葉で、学長の仕事を支えた高橋、富盛両副学長に感謝し、思い出深い一夜となったと語った。65歳という区切りの年齢で職を引くことで多少の解放感を味わっていると心の中を覗かせた。さらに、今年6月に突如発表された「連山プラン」は国立大学協会の副会長でもあった中嶋学長自身にとっても衝撃だったと語られた。また、明治以来日本の近代

化の物差しだった外国語教育の意味が大きく変わってきているという現状をふまえて、東外大の将来像にも思いを馳せた。さらに学長最後の仕事として大学史の資料編が近く刊行されること、一ツ橋に東京外国語学校発祥地の碑を建てる計画が実現される予定であることを語った。

投稿原稿の扱いについて

会員短信、つどい、あるいはフォーラムなどの記事は会員の皆様から寄せられる原稿をもとに作成しておりますが、会費を全然納入されていない方から原稿が寄せられることが時折あります。そのような場合、会費を原資として、会員有志の完全なボランティア活動によって発行されている会報に、全額もしくは一部でも会費を納入されている方からの原稿と同様に扱うことは公正さを欠くおそれがありますので、今後は、会費が一部でも納入されるまで掲載を見合わせることにさせていただきます。ご了承ください。会費納入につきましては引き続きご協力をお願いいたします。会報委員会

文化講演会のお知らせ

—— 母校の先生をお招きして ——



講師 亀山郁夫氏

演題 「熱狂を見つめて——20世紀ロシア文化における全体性」

20世紀のロシア文化にとって「熱狂」そして「全体」とは何か。主としてスターリン時代の文学・音楽・美術・映画を広く渉猟しながら、同時代の知識人と「熱狂」の表象をめぐって考える。

日時 2002年2月9日（土）14：00～16：00

会場 東京外国語大学本郷サテライト

講師紹介 1972年東京外国語大学ロシア語学科卒業

現東京外国語大学教授(総合文化講座「ロシア語」)

著書 『ロシア・アヴァンギャルド』（岩波新書）

『破滅のマヤコフスキー』（筑摩書房）

問合せ、連絡先：東京外語会 TEL 03-3815-5877 FAX 03-5842-8377

会員活動委員会 相馬壽美乃（F昭39） TEL&FAX 03-3465-6835